

## 福祉施設における芸能活動の様相 —介護福祉士へのインタビューをもとに—

An Aspect of Public Entertainments in Welfare Facilities  
— From Interviews to Ward Care Worker —

日下純子  
Kusaka Junko

### 要 約

わが国の福祉施設においてレクリエーション活動の一環として芸能活動団体を招致することは多くの施設で行われていることである。ボランティアとして、あるいは有料でアマチュアからプロに至るまで歌や踊り、楽器演奏など様々なジャンルで高齢者を楽しませている。

本研究では、福祉施設でボランティア活動中のある芸能グループに着目し、それをデイサービスで体験した一高齢者の様子を介護福祉士の語りを中心にまとめたので報告する。

**Key Words：**福祉施設，レクリエーション，芸能，介護福祉士

### はじめに

高齢者や障害のある方々の入所，あるいは通所施設においては通常，日常的に食事や入浴，排泄等の日課の中にレクリエーション活動が組み込まれていることが多い。

例えば、折り紙やぬり絵などは机上で手指を動かすと同時に配色の選択等感覚器にも関与するが、比較的移動の少ない静的な活動である。

一方、風船やビニールボール等をバスケットボールやバレーボールのように投げる、受け止める、打つなど運動器に関与する活動もある。これらは、移動を伴うこともあり動的な活動といえよう。

三好<sup>1)</sup>は、著書の中で機能訓練という形がもつリハビリテーションの限界とレクリエーション的要素を組み合わせるリハビリテーションを行うことのメリットを述べている。同著の中で、ある事例が紹介されている。小脳のバランス器官に障害があるため機能訓練を行うが、徐々に立てなくなり退屈な機能訓練に対してやる気のなかった男性がレクリエーションで風船バスケットボールをやると「スックと立ち上がって」「つま先でシュートを決めて」「ニコッと笑って」「車椅子の位置を確認してから」「座る」という動作をやったのけるのを見て「遊びリテーション」を開発した。現在では全国のデイサービスを中心にレクリエーションとリハビリテーションを組み合わせた「遊びリテーション」が展開されている。

川島<sup>2)</sup>らは、デイサービスのプログラム（レクリエーション、趣味活動、日常操作訓練、行事）の分析を行い、プログラムの作成・実施の課題として「ボランティアの受け入れ」「専門家の導入」「社会資源の開発」等をあげ地域資源の活用必要性について言及している。

## 研究方法

### 1. 対象・方法

東京都郊外のK市にあるカトリック系の社会福祉法人運営の「高齢者在宅サービスセンター・デイサービス」において平成21年6月3日に実施された芸能グループのボランティア活動に参加し、高齢者の様子を見せていただき何らかの変化を呈した事例を選択し、研究対象としての了解を得て行う。倫理的な配慮として、デイサービスセンター及び事例（Tさん）のご家族、芸能グループ（花園直道 with 華舞斗）所属事務所に研究の主旨を説明し承諾を得た。

- 1) 当日の様子よりTさんを選定
- 2) Tさんについて介護福祉士にインタビューを行う
- 3) 花園氏にインタビューを行う

## 研究対象の特性

### 1. デイサービス利用者Tさん

当デイサービスセンターに1年前より週1回通所している60代後半の男性である。現病歴は10年前に発症したパーキンソン病 要介護度5で在宅療養中である。当該デイサービスセンター利用中は、常時閉眼状態で静かに過ごされている。もともと知的障害をもっており、コミュニケーションに支障がある。そのため認知症はないが、認知症専用デイサービスを利用中である。

Tさんを選定した理由は、当日リクライニング式の車椅子で、ほぼ仰臥位に近い姿勢で会場の後方に若い女性介護職に付き添われていたが、その女性職員が観覧中することによりTさんが普段と異なる様子を見せ始めたことを伝えてくれたからである。

### 2. 介護福祉士M氏

当該センター主任で介護職歴24年のベテラン介護福祉士（男性）である。現在のデイサービスでは責任者であり、今回の催事についても企画の段階から担当者との連絡、当日の進行等の総合的なマネジメントを行っている。

### 3. 芸能グループ（花園直道 with 華舞斗）

日本舞踊をベースにした、和洋折衷の舞踊集団である。花園氏は、幼少の頃より古典舞踊に親しみ現在は、日本舞踊坂東流の名取で20歳の男性である。津軽三味線や三線等楽器の演奏もこなす。花園氏が率いるグループは20代の男女10名程度。それぞれが幼少期より芸事を開始し大学や芸能スクールで専門家の指導を継続受講中である。2008年にオリジナル曲「夢舞」「悲しみの星が降る」他でCD/DVDデビューをしており、国内外（ハワイ・フランス・アメリカ）でも活躍中である。

彼らの特徴はオリジナル曲の他、昭和初期から現代の流行歌（美空ひばりや小林旭、その他）に合わせて衣装や振り付けを変えて踊ることである。

### 当日の様子（平成21年6月3日）

デイサービスセンターに設えた舞台を囲むように利用者40名程度参集。椅子での座位姿勢が可能な高齢者は椅子に腰掛けて観覧。車椅子利用者は、それぞれの車椅子で観覧していた。

Tさんは、会場の最後方で介護職の女性職員に見守られながらリクライニング式の車椅子で観覧していた。開眼はしているが、特に発語はない。

M氏の進行で「花園直道 with 華舞斗」の舞台が開演した。比較的大きな音量の中、華やかな和服に身を包んだ若者が踊り始めた。ほどなくして会場は手拍子や歌拍子で賑わいを見せ始めた。

Tさんについて傍の女性職員が驚きの声をあげた。その理由を女性職員に尋ねると、普段は閉眼しているのに、今日は開眼していること、花園さんが来たよと声をかけると嬉しそうな表情をすることなどを伝えてくれた。実際にTさんは、開眼して表情は穏やかであった。

花園氏は、前方の舞台で踊るのみでなく、会場内をくまなく踊り歩き、一人ひとりの方と目を合わせて握手をして回る。Tさんの傍にも来て、Tさんの手を握った。傍の女性職員が「花園さんだよ、良かったね」と優しい声をかけていた。その時のTさんの表情は満足そうであった。舞台は1時間続いたが、Tさんはずっと開眼し穏やかな表情で過ごされていた。

### インタビュー（平成21年12月19日）

#### 1. 主任介護福祉士M氏にインタビュー

##### 1) Tさんについて

Tさん自身が、花園氏の舞台を観覧したことによりADL等が急激に変化したことはないが、当日音楽を聴いて花園氏の顔を見て握手するという「触れ合い」の行為には喜んだと考えられる。日頃のデイサービスでは見られない開眼や覚醒しているといった普段と異なる反応が見られたことは意義深い。Tさんの好きなテレビ番組は「水戸黄門」であること、中でも「由美かおる」がお気に入りと聞いている他は、特に好みのことがなく花園氏達のことが喜んでもらえたことは、良かった。

## 2) 花園直道 with 華舞斗について

当該デイサービスには年間を通じて3ヶ月に1回程度の割合で様々な芸能集団がボランティアとして来所する。ハンドベルやハーモニカ、踊り、クラシック等々アマチュアからプロまで定期的にあるいは不定期に訪問があり利用者の方々も演奏に参加することもあり、大変喜ばれている。

花園氏達については、今回が初めての来場であった。そのきっかけはデイサービス利用者のご家族であった花園氏のファンの方の提案で実現した。彼らのパフォーマンスは派手で華やかで衣装も演目に合わせて交換するなど、他の劇場で公演する場合と同じようにしている。前方の舞台で演じるのみでなくデイサービスの会場を回り、高齢者と視線を合わせ手を握るという「触れ合い」を大切にしているところが他の団体と大きく異なる。またプロであるため当然のことであるが踊りや演出などが巧妙である。

また、オリジナル曲「夢舞」に合わせて手拍子や腕を左右前方に伸展、屈曲、旋回するなどリハビリ体操的な要素も取り入れており、観客は受身のみでなく能動的な動きをすることができる。

最後に利用者、職員も交えて歌い、踊る方法は会場を興奮の渦に巻き込み参集した人々に興奮と感動を与えていたと思われる。

当日はTさん以外にも花園氏の舞台を観て感動したと伝えてくれた高齢女性が存在した。このような例は珍しいとのことである。

今後も花園氏らを招く予定の有無についてお尋ねしたが、24年間の経験の中で花園氏らは、かなり質の高い集団であり、是非再演を計画したいと考えている。

しかし当日、中には音量の大きさに不快感を申し出た利用者がおられ別室に移動していただいたこともあり、プログラム作成に当たっては、利用者さんのニーズを把握する必要があることを再認識したと話されていた。

## 2. 花園直道氏へのインタビュー（平成21年5月9日）

### 1) ボランティア活動をするようになったきっかけ

15歳より舞踊と三味線でプロ活動を開始してきた。その中で師匠や先輩

と共に高齢者の施設等へ慰問する機会があり、自分達の芸を観て喜んで下さり、中には涙を流して下さる方もあり大変驚いた。認知症の方は特に喜んで下さることも経験した。

独り立ちして芸能活動を開始した時には、特に迷うことなくボランティア活動を開始した。

## 2) 現在のボランティア活動について

「全ての皆様を気分爽快に！」をモットーに「若輩者がおこがましいかもしれませんが、でも自分達の芸を観て、少しでも気分爽快になっていただける方がいらっしゃるのなら、それだけで幸せです。これからもこの活動を続けていきたいと思っています。」今後もライブ活動の一環として様々なボランティア活動を行っていくとのことである。<sup>3)</sup>

2008年の活動実績は、高齢者施設が10ヶ所、その他チャリティコンサートへの出場が数回、刑務所や障害者施設への訪問も経験している。

プロとしての活動と両立の困難さを質問すると、どんなに多忙になっても形を変えてでもボランティア活動は継続していくと誠実に決意表明してくれた。

彼が率いる集団のメンバーの中には、介護職の経験を持つ者もあり、その経験は福祉施設での活動にも役立っているようであった。

## 考察

平成21年3月初旬、全国放送のラジオ番組から流れてきた「花園直道 with 華舞斗」の高齢者福祉施設でのボランティア活動放送の様子は、筆者のそれまでの高齢者福祉施設でのボランティアによる公演の認識を覆す内容であった。

アナウンサーのインタビューに「何も言えない」と答える高齢女性の声は、興奮に満ち溢れていた。「何も言えない」と表現したその女性は、つい先程まで観ていた花園氏のボランティア活動による舞台がいかに素晴らしいものであったかを物語っていた。

それほどまでに高齢者を感動させる活動があるのかと、高齢者福祉施設でのレクリエーションを見聞してきた筆者は、早速、花園氏の芸能活動を見学し、福祉施設におけるレクリエーションを捉えなおしたいと取材を申し入れた。

それから3ヶ月後、今回のデイサービスセンターでの活動があると連絡があり、花園氏達の活動内容とそれを観覧する高齢者の様子を観察させていただくことにした。敢えて研究として利用者さんを事前を選定することは想定はしていなかった。しかしたまたま会場の最後方で利用者さんの迷惑にならない位置での見学をしていた筆者の傍に来られたTさんの様子が女性職員の言動から、普段と異なる様子であることが認識されたため、関心をもって観察をさせていただいた。Tさんを拝見すると寝たきりに近い姿勢で舞台も見えにくい位置であったが、聞こえてくる音楽や歌声、花園氏はじめメンバーが舞台から下りて会場をくまなく回り、一人ひとりの顔を覗き込むようにしていく様子からTさんの姿勢でも観覧できることが認識できた。女性の介護職員は演目についても丁寧に説明し常に声かけをしていた。その時のTさんの表情は嬉しそうに笑顔を見せていた。

近年、音楽療法や芸能療法等の活動は、高齢者をはじめとした福祉施設で実践され、その成果についても報告がされている。しかし介護福祉士に対してのインタビュー形式によりレクリエーションと高齢者の変化の様子を報告されているものはみられない。

介護福祉士は高齢者や障害者の入浴や排泄、食事などの直接的な身体介護にとどまらず、レクリエーション等を通じて精神生活を豊かにし、積極的な生活姿勢への働きかけをしていくことも重要な役割である。レクリエーションは生活を明るく楽しくし、三好らの提唱する遊びリテーションの中でリハビリ効果もあげていることは、広く知られるところである。

本学科の学生は卒業と同時に就職先でレクリエーションのプログラムの作成、実施をするスタッフの一人として短期大学で学んだレクリエーションの役割と課題を現場で実践していくと考えられる。

要介護度の異なる利用者、生活背景の異なる利用者、認知症の有無や嗜好などを考慮し正確なアセスメントによりの確かなニーズを把握してプログラムの作成、実施に当てる必要がある。さらに実施後の評価は重要である。

ともすればやりっぱなしになってしまい、毎日同じ、曜日ごとに同じことを繰り返すなどマンネリ化にも注意が必要である。画一的、一方通行のメニューに終わらず心身の状態等を考慮し個別や必要に応じて集団に対応することも求められる。

今回は日常のレクリエーションではなく、外部からのボランティアとしての芸能活動を取り上げたが、介護福祉士として地域の社会資源の情報収集もこまめに行う等をして利用者が満足できる専門家の招致も求められる。

レクリエーションとリハビリテーションを組み合わせる試みは、全国的に展開されている音楽を利用した介護予防体操でも実践されている。民謡や外国自慢の歌謡曲など、その地域で馴染んだ曲で体操をする。ペットボトルを利用したダンベルや小さなタオルを用いるなど相違工夫がされている。

今回取り上げた芸能グループ「花園直道 with 華舞斗」はすでにオリジナル曲を発売しているが、花園氏の得意技の扇子を使って高齢者や子ども向けに遊びリテーション感覚の体操を是非考案したいと考えている。実現するには、もうしばらく時間を要するが、これも是非実践してみたい。

## まとめ

福祉施設において介護福祉士は食事や排泄、入浴などの身体的なケアと精神的なケアを通じて「尊厳」ある「自立」したその人らしい生き方を支える専門職である。それでは、実践したケアによる利用者の満足度をどのように把握するのだろうか。例えば、感謝の言葉をいただいたりすることもあり得るが、言葉によるコミュニケーションが困難な場合も少なくない。

今回のTさんは、花園氏達の活動に豊かな表情を見せて下さった。このような「豊かな表情」がケアの満足度のバロメーターの一つになるのでは、ないだろうか。

当日Tさんの傍でTさんの表情の豊かさを感じることができたが、その一つは花園氏達の舞台に対してであろう。さらにもう一つは、Tさんの傍で終始、舞台の状況をTさんに優しく声かけし、Tさんがレクリエーションに参加できるように接していた女性介護職員のケアに対しての満足度の表現であったのではと考える。

### 研究の限界

今回は、介護福祉士に対するインタビューによって福祉施設における芸能活動の様相を報告した。活動の効果を測定するためには、科学的な方法や尺度を使用する必要もあると考えられる。主観的なデータのみでなく、客観的なデータを提示することにより正確な効果が証明できると考える。

今後も継続して福祉施設におけるレクリエーションの一分野としての芸能活動の実態と観客の変化についての分析方法の検討が必要であると考ええる。

### 謝 辞

本研究ノートをまとめるにあたり、快く申し出を聞き入れて下さったTさんご家族、並びにインタビューに応じて下さったM主任、花園氏に心から感謝申し上げます。

### 引用・参考文献

- 1) <http://www.mlit.go.hskushyo/toransuport/shouwa48/ind60202/001.html> 2009年12月
- 2) 川島貴美江・山田美津子『高齢者のデイサービスセンターにおける介護プログラムに関する一考察』静岡県立短期大学部紀要2004年
- 3) 花園直道 通信 2008年
- 4) 和久田佳代『介護福祉士課程におけるレクリエーションの役割と課題』聖隷クリストファー大学紀要2006年
- 5) 坂本宗久「遊びリテーション」

- 6) 柿本真弓・島貫啓『体操の効果に関する事例研究』福岡大学スポーツ科学 2004年